

伊藤光男先生を偲んで

太田信廣

昭和 45 年に東北大学化学教室の教授として赴任され、平成 4 年までの 22 年間量子化学研究室を運営された伊藤光男先生が 2019 年（令和元年）11 月 14 日に享年 90 才にてお亡くなりになりました。私は昭和 46 年に学部 4 年の学生として研究室に配属となり、修士、博士課程も含め、丸 6 年間研究室でお世話になり、その後も大学にて教職についたということもあり、伊藤先生には長きにわたって公私ともに大変お世話になりました。お亡くなりになってもうすぐ 2 年が経とうとしておりますが、いろいろ懐かしいことが思い出されるばかりです。

思い起こせば、私が伊藤研に配属になりお世話になってから 50 年になります。伊藤研 2 期目の学部生配属であり、化学教室はまだ片平にあり、卒論実験はそこで行いました。研究室スタッフとして、茅幸二助教授、三上直彦、宇田川康夫両助手が揃って、まさに研究室を立ち上げているという時期でした。今考えてみますと、ヘリウムネオンレーザーがあって、格子振動のラマンスペクトルを測定する程度の実験装置しかなく、伊藤先生が助教時代に行っていた格子振動のラマン測定の延長だったと思います。私の卒論もフェノール分子性結晶の格子振動ラマンスペクトル測定とその解析でした。そのような状況から、新たな実験室を立ち上げるべく、ナノ秒窒素パルスレーザーの作製、光子計数型光検出装置の作製等、種々の実験装置の組み立てに伊藤先生を中心に 4 人が一丸となって昼も夜もなく働いておられました。量子化学研究室のような物理化学研究には、市販の装置を使った一般的な実験ではなく、独自の特徴ある装置を用いた測定が重要であり、そのためには装置を自作することが欠かせません。尤も、当時の伊藤研には市販の高価な装置を購入する資金もなかったのかもしれませんが、いずれにしても、当時は若かった 3 人のスタッフの先生方（三上、宇田川、茅）が装置の作製および実験を行う後ろから、伊藤先生がじっと心配そうに見つめておられるというのが目に焼き付いています。装置の立ち上げに多忙で、私が配属された当時は、学生の面倒は正直見る暇もないという感じでした。真面目な先輩学生からは文句も聞こえてきましたが、私自身はいい加減な学生でしたので、怒られないのをいいことに、当時一番町にあったパチンコ店「ボンボン」でよく油を売っていました。研究室を立ち上げるといことは如何に大変か、研究を行うためには昼も夜もなく集中して働く必要があるということをその後ろ姿から学ばせて頂きました。後年の私の研究生生活の指針になったように思います。伊藤先生だけではなく、三人の先生方もお亡くなりになられたのは誠に残念なことです。最近、日本の大学の講座制のあり方に批判的な意見も多く聞かれますが、伊藤研初期の研究の進展は、講座制抜きには考えられないように思います。お金もあまりなく、サポートシステムもできていない状況で新たなことを始めようとしたら、得意領域が異なった複数の人々が互いに協力し合う必要があり、伊藤研の創設期にはそれがうまく機能したお

かげで発展できたのだと私は感じています。スタッフ個々の方々がどのように思われていたかはわかりませんが、日本化学会賞および紫綬褒章を受賞された伊藤先生だけではなく、当時のスタッフ全員がその後に教授となられ、そして文化功労者顕彰や日本化学会の各賞を受賞されているのは当時の研究に対する取り組みに起因しており、伊藤先生の研究に対する姿勢や研究室運営方針は見習うべき点が多いと私は思っております。スタッフには外国に長期滞在をさせて研究生活を経験させるべきとも考えておられて、それを実行しておられました。現行講座制では、教授、准教授、助教が 1:1:1 が多く、一人でも欠けると教育、研究に支障がでるということもあり、任期制の問題もあり、サバティカル制度がありながら、なかなか伊藤研のようにはいかないのは残念なことです。伊藤先生は、まずは基礎研究だとよく強調されておられました。自由な発想で、自分が面白いと思うことをやれ、ということだったと思います。自分の研究が世の役に立たなくても良い、と思う人がいるはずがありません。要は目先のことに拘らずに自分の好奇心に従って基礎研究はやるべしということだったと思います。現在の大学のありようとだいぶ異なるように思いますが、大学における研究とは本来そうあるべきなのではないかと私も思う次第です。

私が修士 1 年の昭和 47 年に青葉山に化学教室が移転した頃から、研究室も軌道に乗ってきたように思います。ヘリウムネオンレーザー、アルゴンイオンレーザーおよび窒素パルスレーザーを用いた共鳴および前期共鳴ラマンスペクトル測定による研究が活発になっていきました。私や同期の阿部直道君、一年後輩の加茂川恵司君、飯島（高橋）真知子さん、博士の学位取得のテーマはいずれもラマンスペクトル測定に基づくものでした。伊藤先生の学生に対する指導方針は、一方的なものではなく、学生の立場で、こういうことをやったら面白いのではないかと、というのと、「じゃ、やってみろ」というのが常でした。お互いが自由に言い合えるのが大学の研究室と思っていましたが、全てがそういうわけでもなかったようです。伊藤先生は、学生と共に研究室で宴会を開くこともしばしばでした。そして大いに盛り上がっては、「実験では現象顕著」が大切としきりとおしゃっていました。一目瞭然に人々に驚きを与えるような結果が重要だと強調されました。また褒めることの大切さを強調されておられました。ご自分の先の見えない長い厳しい助手生活の中で、学会で高名な先生に仕事を褒めて頂いた時の嬉しさとモチベーションの向上から、素晴らしい仕事に対しては素直に褒める必要があると折にふれておっしゃっておられました。そして、良い仕事をしているにもかかわらず不遇の状況にあるような方々には非常に暖かい目で接しておられたように思います。当時は、偉い先生は厳しい、が常識でしたが、人を育てるには褒めて伸ばせという最近の傾向を、ご自分の経験から先取りされていたということなのかもしれません。先生にはお子様がいらっしゃらないということもあったかもしれませんが、学生とは本当にフランクにお付き合い下さいました。外国からのお客さんが来られたときは、学生を含む研究室メンバーが伊藤先生の吉成のご自宅にご招待にあずかり、奥様の手料理を外国からのお客さんと共に頂くこともしばしばでした。客人の中には、結構長く伊藤家に滞在されていた有機ケイ素化学で著名な R. West 教授（ウイスコンシン大マディソン校）、化学レーザ

ーや低温マトリクス分離で著名でありアメリカ化学会の会長も務められた G. C. Pimentel 教授 (カリフォルニア大バークレー校)、一重項―三重項状態間エネルギー移動やナノ金属粒子の研究で著名であり、長らくアメリカ化学会誌 J. Phys. Chem. の編集長を務められた M. A. El-Sayed 教授 (当時カリフォルニアロスアンゼルス校)、等がおられたと記憶しています。彼らの凄さを当時の私はほとんど知らなかったのですが、今となっては伊藤先生が当時から如何に世界的に知られていたかを顕著に示していると確信をもって言うことができます。後年、日米の光物理化学のシンポジウムで一緒したことがありました。写真はその時のものです。日本側は田中郁三教授 (東工大)、アメリカ側は G. C. Pimentel 教授が代表でした。後年のノーベル化学賞を受賞された Zewail 教授 (カリフォルニア工科大)、S. Boxer 教授 (スタンフォード大)、N. Turro 教授 (コロンビア大)、C. S. Parmenter 教授 (インディアナ大)、P. Barbara 教授 (テキサス大オースティン校)、又賀昇教授 (阪大)、志田忠正教授 (京大)、広田襄教授 (京大)、土屋荘司教授 (東大)、吉原経太郎教授 (分子研)、等々日米の蒼々たる物理化学者が集まっていたセミナーでした。私は助手の時代で、北大の馬場教授の代理での参加でした。日本人トップバッターとして登場した伊藤先生は、当時の超音速分子線を用いた研究成果を発表されたのですが、1時間の持ち時間の中で、発表中に次々と質問攻めにあいながらテキパキと答えながら進める様に、私は感銘を受けておりましたし、Pimentel 教授の挨拶の中で、伊藤の発表があっただけでこの会議は成功だ、とおっしゃっていて、私も鼻高々でした。1時間の持ち時間で、講演の途中で次々と質問がとんでくる会議での発表などそれまで経験がなかった私は英語が得意でもなく、発表前に足が震えて仕方ありませんでしたが、伊藤先生から緊張の時はアルコールでも飲んで開き直ればいいんだと慰められ、教えに従いウイスキーを煽って何とか凌ぎました。私は気相分子発光の偏光特性と磁場効果の話をしたのですが、その際に、Zewail 教授が "Magnetic field effect is very interesting" と言われた言葉が今でも耳にこびりついており、伊藤先生が常々おっしゃっておられた、好意的な言葉、人を褒めることの大切さを実感しています。いずれにしてもこの会議を通じて、伊藤先生への絶大なる評価を痛感した次第です。勿論、先生には優しさだけではなく厳しい面もありました。学会研究発表前には、研究室で何度もダメ出しで練習させられました。先生ご自身が非常にわかりやすい発表をされるので、そうできない我々には歯がゆくてしかたがなかったかもしれません。また、学会発表時における質問に関しては、学生が答えに窮していると先生がお答えになり、誰の発表なのかわからなくなることもしばしばでした。また学会発表前に送られてくる講演要旨集に基づいて、読み合わせをするのが常でした。公費で学会に参加する以上は、他の研究室の講演に對して、質問の一つもするのが最低限の義務であり、そのためには予め要旨集を読んでおいて何が問題かを検討しておく必要がある。議論し考えよう、という教育でした。現在の研究室で、講演要旨を皆で読む輪講を行っている研究室がいくつあるのでしょうか。これらのことを通して、先生は学生を鍛えていこうとしたのだと思います。まさに、厳しさと優しさが同居した研究室の雰囲気でした。伊藤研で学位を取得し、大学に職を得た方が多いのもかかる教育によるようにも思い

ます。

岡崎国立共同研究機構長ご退職時の研究室同窓会の写真にあるような、伊藤先生を中心とした伊藤研同窓会を度々開催して下さい、卒業生との交流を大切にして下さいました。また、伊藤先生、三上先生（伊藤先生に引き続き量子化学研究室教授）および阿部弘美さん（伊藤研で長らく事務官を務められた）のご尽力により、毎年更新された研究室同窓会名簿を伊藤研同窓生全員に送って下さいました。その名簿には、伊藤先生の絵が表紙に描かれており、それを拝見するのが楽しみの一つでもありました。何しろ、最近の先生のご職業は「画家」とご自分で記すほど打ち込んでおられ、その腕前でもあったのは周知の事実です。

お亡くなりになる2ヶ月前の2019年9月17日より、伊藤研のメンバーが参加していた学会でもある分子科学討論会（前身が分子構造総合討論会）が名古屋で開催されました。私は北大定年退職後に台湾の国立交通大学（2021年2月より合併により国立陽明交通大学と名称変更）に移って行っていた研究成果を発表すべく参加したのですが、その直前に、伊藤先生に進行性癌が見つかり緩和ケアを中心とする病院に入院された、ということを経験した研究室同窓生より聞いておりましたので、メールで先生に了解を頂き私の発表後に会場を抜け出してお見舞いに伺ったのでした。先生は、ご自身が描かれた奥様の絵を壁に掲げた広い個室におられ、耳が遠くなっておられました。以前とあまりお変わりのない様子で、病院内を案内して下さいました。枕元の冷蔵庫にはビールが入っているぞ、ともおっしゃられるので、私はアルコールを持参すべきだったかなと一瞬思いました。アルコールが好きな先生とはいえ、いくら何でも思いノンアルコールの品にしたのでした。先生は、ご自身はまだ思い残すことは何もないと強調され、達観された面持ちでした。東北大学時代は研究に没頭され、所長だった分子研ではご自身の研究からは一切身をひかれて管理運営に打ち込まれ、そして最愛の奥様を2015年1月にお見送りされたということもあったかもしれません。私は先生のお体に不安を抱きつつもそれまでのご厚情に感謝の意を述べて病院を後にしました（その時にとった先生とご一緒の写真です）。それからたった2ヶ月後にお亡くなりになるとは思ってもみませんでした。まだコロナ禍の前でしたので、お葬式が無事行われ、多くの方が最後のお別れをすることができたのは何よりだったと思います。先生の遺骨は東京の墓地に収められているということですので、このコロナ禍が収まったら、同窓生と共に墓参りができればと願っています。

伊藤先生、長い間本当にお疲れさまでした。ご指導頂いた伊藤研同窓生の一人として心から感謝申しあげますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。



1987年にハワイで開催された日米セミナーの集合写真。前列で Pimentel および Turro 両教授の間にいる伊藤先生。後方で Zewail および 志田両教授の間から顔を出している私。



2001年に伊藤先生が岡崎国立共同研究機構長をご退官された際の研究室同窓会の集合写真



お亡くなりになる 2 ヶ月前（2019 年 9 月）にお見舞いに伺った際の病室での写真。